

## 館長だより 第7号(令和7年3月22日)

### 春期企画展がはじまりました

3月15日から春期企画展「古代人のよそおい」を開催しています(～6月15日(日)まで)。和歌山県内の遺跡から出土した石製やガラス製の玉類、金製・銀製の耳飾り類など、ネックレスや腕輪、イヤリングなどとして用いられた遺物を中心に、古代人の身を飾ったアクセサリーを展示・解説しています。



人の身を飾る装飾品は、木・石や貝・骨などの自然の素材を加工してつくるところから出発しました。そうした素材の世界に、ガラスという人工的な素材が出現することは革新ともいえる出来事だったといえるでしょう。日本列島でも、弥生時代中期の紀元前3世紀にはガラス玉が確認されます。ただし、日本列島で出土するガラス類は、列島内で加工されたものであっても、素材としてのガラスそのものは海外からもたらされたものでした。

科学的な分析によると、弥生時代以来日本列島に流入してきたガラスは、インドから東南アジアで生産されたガラス(インド・パシフィックビーズ)で、弥生時代後期後半には地中海周辺で製造されたガラスが入るようになり、古墳時代中期になると西アジアから中央アジアでの製法によるガラスが大量に流入するようになると思われます(肥塚隆保・大賀克彦・田村朋美「材質とその歴史的変遷」『月間文化財』566号・「特集 古代ガラスと考古科学」2010年)。こうした変化はガラスの流通経路の変化を意味しますが、では果たしてガラスだけにみられる変化なのか、そもそも経路の変化の背景には何があるのだろうかと考えると、いろいろと興味がわいてきます。最近のDNAの解析研究からは、古墳時代が日本人のDNAに大きく影響を残す時期であるとの仮説が提示されていますが、素材ガラスの変化はヒトの動きが反映していると言えるのかもしれません。

岩橋千塚古墳群からも多くのガラス玉類が出土していますが、早い段階の調査だったこともあって、出土ガラスの科学的分析はあまり行われてはいません。ただ、近年に石室を再調査した天王塚古墳では、出土したガラス玉類を科学的分析にかけた結果、インド・パシフィックビーズであるとの結果が出ました。この結果は、さて何をあらわすものでしょう。

アクセサリ類は、その用途からして大きな形態にはなりにくいものですが、特別な目的でつくられることもあって、ガラスのみならず、ヒスイやコハク、南海産の貝など、その土地では入手しにくい素材を加工してつくられました。素材そのものが希少品・貴重品だったことになります。小さな出土品がもっている大きな背景に目を向け、思いを巡らしていただけだと願っております。



展示会場には古墳時代の衣装の試着コーナーもあります。ご自由にお楽しみください。

### 寒緋桜（カンヒザクラ）が咲いています

ここのところの暖気で、資料館南側の広場にあるカンヒザクラの花がひらきました。



隣の大島桜（右側写真）の蕾も膨らんできました。もう少し時間がかかるでしょうが、桜の季節も間近に感じられます。